雑言真澄かゝみ
小とも取経緯圖解

完

ホ 2
544

門 ム加ム
號 544
函

詞真澄鏡解

詞大むね有形無形假轉用合屬の六つに分託さる。然して有形詞言も、名ありて形あるもの、無形詞言ハ、名ありて形なきもの、假詞言ハ、名にもあらず形あるにもあらず、只言にして動く事なきものなり。轉用詞言も、用言より轉りて詞言となるもの、合詞言ハ、詞言と詞言と合せて成れる言どもなり。屬詞辭ハ、動の如辭ざるものなり。此の六種各々更に六種に分き通計、三十六種となる事本圖の如し。おゝそ世に

體言といふもの凡千萬ありとも、此の六種の外に出づるものあるべからず。今其の體言どもを其證據まさやかに見えしむとて、如此ものをしるし侍るになむ。

有形體言

こゝに何の類々々と書きたるは、類を分て示すも素より寧ろにて、要とする言を一つ二つ擧げて、其の餘を類推して知るべきことを知らせあるなり。其をまばかりの名どもあるを見ては、天神地祇は更なり。雷、木靈に至るまで、其の數

し、中古の書どもにも取れり。其の辭どもも有りの盡擧げまほしけれども、所狹ければ、草辭をのみ擧げて、合辭をば大方に略けり。其故は亦將然連用等の五段に分ち、係辭をさへ加へたるも、上の書どもに及び玉の緒、辭分、未合擬、詞の捷徑、辭格考、當の說に據れり。其の體裁は、みなそれら八衢、捷徑、活語大成圖に從ひ、なほ己が意を加へて物しつ。

作用言 形狀言

作用を表わざ、形狀に何なるかなりとも詞の

切きて止は音は、五十音第二位いの韻なると
第三位うは韻なる等の差別なり。いは韻なる
ハ、志りは二作にて、良行四段一格は活と久志
幾は活とは二あり。うの韻なるハ、久すつぬ
ふむゆうるは九つにて、四段は活及び諸活な
り。本図はさ体を見て辨ふべし。凡世に用語と
いふものゝ、此は二つを出ざるなり。此ハ脚結鈔に、
事と状とに二作に分てるが始めなれど、今ハ専ら
言語四種論に從へり

係辞

なれバ、試に挙ておきて、識者の考定をまたば其
が中に歩つは俗称を取れて。詞代ハ全く合もざ
れど暫く段に當つ。升ハ古称なるべくれがゆ。
おも欠ハ奴をいふ。此ハ俗称のもし欠ハ、文目
にも何らで、重名のおを省き、もじ字撥ていへる
訛言なるべく思ひるればなり。又事業詞言ハ
大かた用言は轉ずると二言は合さるると
なれバ、下は轉用詞言と合詞言とに入るべき
もは、如し。然るを今こて小業とさるハ、かき
ハ時々の作用にかまで、一つは事となれるを、

此社ハ公私に定まれる事業なればなり。人難
むる事なられ。

轉用體言

こゝに下一段のけまでハ、全く上の事業體言
に入るべきものなれども、此ハ、此詞他に證せ
らるべき詞見當らざれバ、暫く擧げおきて後
考をまつ也。

合體言

此ハ、のもるばな（春花）あきさめ（秋雨）當此數言ハ、有形と
無形と合されたるものなれど、なほ一種のも
のなれバ爲をべきが如くなれども然分きむも煩
もしけれバ、有形無形合體言の域中に收め
置いて、これ字わのつ。又轉用有形合體言の部
にてむかも（手向股）、轉用無形合體言にいさもごと（讓言）
まがごと（枉事）、假體有形合體言のむなで（空手）まさで（平手）、假
體無形合體言にあたらよ（可惜世）しづごゝろ（静心）、等の上
に加はるさのむの當の詞どもハ皆一音づゝ
省のきて、續けるものなれ。心得おくべし

屬體辭

こゝに擧げたるハ、上に附ける辭どもにて、此ハ

邊が以へる頸挿(カザシ)なるものなり。そが中にて
二た也へバ志うシテ示せの如く片仮名して
書ける八、下に在れる辭どもにて脚結(アユヒ)なること
を知らせたるなり。そハ皆詞の經緯圖に載
せたる辭どもなれバ、其の格に従ふべし。又こ
とに下にに在れる辭どもをさまわきまるをハ殊
更に心に留め置かざれハ書語にのぞみて惑
ひぬべし。意得おくべきなり。

詞の經緯圖解

此の圖ハ詞の八衢を經とし、詞の玉乃緒を緯と
し、脚結抄、活語指南、語學新書、考を折衷し、自己
の考を取りて之を制せり。其が中に、下一段活
も、活語斷續譜、詞の緒環、語格指掌圖、八衢頸註、
等に従りて補ひ、それに對(カナ)へて、本書に一段と
しもある、上一段とし、又中二段とあるをも、
下二段に對へて上二段と改めつ。又變格活三
行を四段の活と下二段の活と三段の活とに
分ちて、各二活とせるハ、山口栞、活語大成圖、言

靈の道しる從、等を參考し、なかなか別に思ひ得る
變ありて、必ず此ならでは叶はざる誤は、改めつ
るなり。又本書に形狀言の漏れたるが多く、上に
擧げある、脚結鈔以下の書等に據りて補へり。
其が中に、久志幾の活は、諸家皆別に志久志志
幾の活と以ふを立てゝ、二活とせるを、今久志
幾の活に併せて一活としたるも、簡易にして
事足れるをもてなり。又係辭を、異ざまに書く
或は、玉の緒の外、十五家の異同を考訂して定
めおきたり。又辭は、記、紀、萬葉、祝詞宣命は字本と

をすくにとあるを見て、皇國内の大き小
さき國名をもまた豐葦原中國の如き大地の
大名をも又海外萬國、まれ所々の小島の名、また
高天原、夜見國などに至るまで、皆其の類と知
て、おほぢおほばとあるは、曾祖父（オホオホヂ）曾祖母（オホオホバ）もその
類、をぢをばと云へるは、舅姑も其の類と知るべ
きなり。其の他を擧げて此の例と知るべし。如此
て、小、小神、神魂など擧げたるを、其を共に世形
ある名は思ひも有るべけれど、神は今こそ
日本も見え、旅、顯幽以下など分まざる以前は變

なれバ其の合せし後も、一言主神、加茂なる大神な
ど御形を現し御託し坐まして、古傳に昭々
たれバ、寶物なること明かなり。魂も、平常にハ
見えされど、萬葉に、人魂のさ青なるなどとめ
られぬて、手を離す、時も、光耀を放ちて浮き行
くものなれバ、有形物なること、何の疑もなし。

世所謂言

さて此数多謂言に、以て流ずハせ、以て志し、
いくこまを、いくおかまを、いくなをも先、其の目
穴、杜撰に似たれど、必しも然らバ叶はさる事

係辞ハ、指辞よりハ上にて係りて、下なる詞字
截断して、止らしむ係辞なりさてゝ、に、れの
ながらと録せるを、上なる係辞字俟たずして截断
言を自づからに截断して、止むる格を知らする目
なるぞ。之はじめて、てはをもとでど等を以
ふなわざなれ、最軽き辞なる故に、上より係りく
ことも、下なる詞字引止むるばかりなく、たゞ
截断言の便に截断して止らしむるなり。
ぞやのなむハ、少し重きなれ、連謂言を轉じて截
断言ならしめ、こそハ、最重き故に、己然言を轉

志を截断言ならしむ。の」ぞ」ハ、半を軽き志を、上
れしはじくの辭を屬きて、截断言へかて、半
ハ重きしをぞ」や」か」なむ」に屬きて、連體言へ係
る。其の用たるに屬く所の係辭と同じ。なれて」
は」を」ち」等れくさじく辭を、軽き故に、ぞ」や」か」
なむ」こそ」ハ、重なる時も、ぞ」や」か」なむ」その格
に従ふなり。の」が」れ軽き方のも亦同じかるべし

未来格、過去格、現在格、未過去格、未来格、

未来格ハ、ゆくさきの事をいふなり。過去
格ハ、さりしかたの事をいふなれ、現在格ハ、
目前の事をいふなれ、未過去格ハ、目前
前の事より来しかたへ係る事をいふなれど、未
だなり。

将然言、連用言、截断言、連體言、已然言、請、

将然言ハ、然らむとする事をいふ詞どもにて、
未来格、連用言も、用言へつゞく詞どもにて過
去格、截断言も、きれて居る詞、連體言ハ、動かぬ
言につゞく詞どもにて、共に現在格、已然言ハ、
已に然る事をいふ詞どもにて、未過去格なれ。
請ハ、世にいはゆる下知の詞にて、亦未来格截

断の例なり。然るを上の連用言は、いひ居られ
ば終言となる、是を精用終言と云ふ。さて上
の係辞は此の六段とも、皆格なれば、図中終始皆
に通りて其の格違ふことなし。

四段の活

此の活、截断連續同音なるが故に、辨別しがたし
をば古文にまれ古歌にまれ、其の續ける様を、
委曲に考へて辨ふ際は、たとへば、上にて」は」を」
ぞ」や」と」當の係辞あれば、其の結びとなれるは
の」も、截断言、が」や」か」の係辞あれば、其の結びと

なれるは、連續言なり。又らむ」らし」べき」めり」
けり」とも、當の辞して受けざるは、截断言なる」
めで」ぬ」まじ」あり」當の辞まで受けたるは、連續言
なれば、係辞と受辞との図ーざねを考へて
暁るべし。次條の截断連續は、これに倣へ。又此の
活の截断と、下の上二段の活、下二段の活の截
断とは、共に、第三位の韻なるが故に、互に紛
れ易し。又此の活詞ども、上二段にも、下二段にも
轉りて、自他のわかるるあり。異ならざるなり。其も
亦其の文其の歌の意詞を、つばらに考へてば、

自ばから知解らむべし。此の事猶上二段の活。下
二段の活の下に註せる如し。又此の活、第四
位の音を具、良行四段の活一格の有へ轉りて、
一種の活詞となること知る。下の良行四段の
活一格の下にいふが見るべし。又奈行の往ぬ、
も皆變格活と目けて、な」に」ぬ」ぬる」ぬれ」ね」と活
く詞とせり。そを今四段と三段と二のさまに活
く詞と定めて、さへ収めたれど、又この詞、其の使
轉じて辭ともなる。受くる辭の中なる、去ぬ」の類の
辭の一種即是なれば、又こゝに請」の詞、ぬ」を加へ

て以有る事まれ「し」あり。

上一段の活

此の活、截斷連體の同音なる故に、上にいへる如く
志を辭ぶ法し。將然連用の同音なるを、ず」て」じ」
め」か」む」まし」等の辭して受けたるは、將然言、て」つ」
ぬ」き」けり」けむ」等の辭して受けたるは、連用言
ぞ知るべし。次の三條これに倣ふべし。斯て此の
連用言は、截斷をも兼ねると思ふべし
あれど本國の末に云ふ如見合せて知る法しるべし
し、其の國を截斷へ分けて、果てさるは、其を知らせ

むとなる。

下一段の活

此の活、波行の綜ハ、若くハ下二段さ活く詞にや
定め難きにあらねど、先哲の定名に拠れバ、
しバらく掲げて、後の考を俟つ。

上二段の活

此の活、上よりいへる如く、四段の活と、下二段の
活とにて紛れ易し。されど、波行の活にていへ
ば、延ぶるといふ詞も、にてハ、變の類活に
て、物のおのづから然るをいふ詞、下二段にて

ハ、堪への類活にて、物を然せるをいふ詞なれ。然
して共に截断せらるゝなり又学ぶといふ詞も、
さハにてハ、なかなか變の類活、四段の活にてハ達
の類活にて、共に自づから然せる故いふ詞なれバ。此の
類なるが多し。豫て心得おくべし。

下二段の活

此の活も紛れ易き事、上にいへる如し。それ
解くといふ詞も、さし合にてハ、受の類活にて、物
の自ずから然る故いふ詞、四段の活にてハ、能
の類活にて、物を然せるをいふ詞なり。されど

截断にては、其に同じくなり。又伏せと云ふ詞を、
さしにても、瘦の類活にて、物字然る故いふ
詞、四段の活にては、押の類活にて、物の自然の
ら然るを以て詞なれども亦截断すれば、共に
ふせを云ふ。此の類少からず。又佐行の熟は、本書に
変格活とせり。今それを四段の活とさしの活と
二方に、活く詞也と定めて、其下に加へあるなり
其の二方に、別たざれば宜しからざ故なし、
下に云ふ隠し又さしの諸の詞、をさめ流とあ
たせ、負せなどより加へざても以上ある事まれ

くなて。

四段の活一種

さの活、来は、來と活ける例見あたらざれ共、□
を加へてわるを見やきは、き（ーき）のくは足ぶ
ら云ふにくか行りくはで、けれまうけり、はのひ
のけきば、正ぜ此れて、四段に活く例多数にて
灼し。為もさと活ける例見あらざれば、皆く
□字加はて別てる。其の他の活きは、更に證せる
に及ばず。又ら、の諸の詞、加行にはなし。

下二段の活一格

されども、上下二段の活も共に変格活と目
けて、こきくくるくれと活き、せしすする
すれと活きて、こしこの世せの、せ續く
と在る、将然を受續く如くに見えたれども、然續く
べきて、共に過去の格なるを、こは格ひなけれバ、こ
切れ二段と連用ならでは叶ふまじき事なれ。
故に如此変じて、下二段の活の一格と定めて、為
ハ全く下二段活詞となれバ、彼所に移し
つ。然して此の諸詞の下に助辞加へて云
へる事、後に記し置く。

三段活

此も、四段の活活下ならぬく、彼の活と此の三
段の活の、二つながら活く詞と定めつ。然れバ、此
を物して此の詞諸ハ活なくて、又こ活詞轉りて
辞ともなす、受る辞なる如類の辞乃一種なり
ける。

四段活一格

此ハ、形状言にて、一名有活とも云ふ。受くる辞の
中なり、何の類の辞ハ、之を受いでたれ。其ハ上
の四段活の一種の中せよりて轉りて、けらけり

りけるけきせらせてせるせれ、となれり。又次の久志幾の活の久より轉りてくあり、不の類の辭のずよりうつりてざあり、雜の辭のぢよりてうつりててありなよりうつりてなありとなれるが、各々約りて、ならかりかるかれ、ざらざりざるざれ、たらたりたるたれ、ならなれなるなれ等の辭となれり。又ここえありなれり、て、知らめれめるめよとなれるなど、皆然なれ。又上にも以て言へる如く四段の活、第四位の音けせてねへえれより轉りて、あけらあけりあけるあけれ、おせらおせりおせるおせれ、などいふ如く、更ならりるれなど活く詞ども甚多し。皆此の活なるを。よく此の活へ、下二段の詞どもを紛誤りもて来て、聞なせり、任せり、具へり、治免り、なぞ以ひ誤るなどは、友鏡にいへるが如し。心を潜し。如此(カク)て、こを連ね言ふ、截断受の辭へ續くなとなりて、本國の末の註を見て辭なべしど、此國字截断へうけて思ひ居るは、此の故と知るべし。

久志幾の活

此の語、大かた五種あり。其が中に、浅深の類ハ、
先哲の定め置給へり。嬉悲の類ハ、うれしくう
れしうれしき、かなしくかなしかなしきとい
ひて、うれしかなし、を以て分る例を記さら
に、諸家皆別に一種の詞として、志久志志哉の
活として一格をたて、此外活に並べて二格と
せり。今考ふるに浅深等、浅瀬(アサセ)、深淵(フカブチ)、高山(タカヤマ)、短山(ヒキヤマ)、
などの如く、あさしふかしなどいひても、體を
成も然、嬉悲等ハ、うれしかなしなどのもいはれてハ、
語を成さば、又げ、さ、み等の辭へ係るとたえ、浅

深等ハ、あさげふかげ、あさ、ふかさ、あさみふ
かみ、などゝ以ふるれども、嬉悲等ハ、うれげかな
げ、うれさかなさ、うれみかなみ、などハ以はざれ
ざれバ、うれしげかなしげ、うれしさかなしさ
うれしみかなしみ、と以ふ格ある故に、浅深等
も、本言を具たる三辭へ係るを、嬉悲等ハ、さハ
係らざれ、嬉悲等ハ、截断より係れて、浅深等をも
ハ係らぬ事となれるハ、以をし類をしく格
も立さぞと以ふべし。こハもとよりあさふかの
等に對へて、うれしかなしと以へるが本言ハ

て、将然連用なる、うれしく、截断ハ、うれ
しかりしハ、連體ハ、うれしき、かなしき、なる
が如し。也同音重なるときハ、一音略きて截断
にてもうれしかなし也のみいへる事と知ら
れるなり。故に志久志志志哉の語といふを止めて、久
志哉の語一概にを定め置るなり。長々し、遠々
し、の類も準へて知るべし。静明なるは、しづかあ
きらかなどいふが本言にて、語く也於は、かをけ
に轉して、しづけく、あきらけく、しづけし、あき
らけし、しづけき、あきらけき也いへるなれば、
しづけあきらけハ即本言の格にて、げさこの
三辭へつゞく事も同じ格なれ、但けへ續くと
きハ、しづかげあきらかげといふ格なり。露に
同格なり。但げへハ續かざるなきさ、の已然
の例也ハ、上にいへる之ありの約りのからか
りするうれの轉じ活るて、全く辭なれバ、こ
いの語詞の例に入るべきにハ非ざるが如し。
然れども、世の語の書なりし以来、諸家にても
久しく列来て又この詞を已然にいふも
に、便なからむをて、舊にしたがへ列ねつるな

て。諸のこれらは亦そあれなる事いふもさらなり。
抑上の中段の活より、こゝにいたりて、上段に書
せる諸活詞の字どもは、詞の八衢に従ひて、を
る格例をしめせるなり。其が中に、白字に書ける
は、一音の詞どもなり。然れば此の字に當る詞
どもを本として、除て同格の詞どもは殘條なる
きて、その用格を誤る読からず。そは、解く和く
は、四段の活、飽の類活、類む、躁む、住の類活、和
ぐる、際ぐるは、上二段の活、起の類活、躁むる、謡
むるを、恨の類活、解くる、續くるは、下二段の活

受の類活、寄する、任するは、痩の類活、教むる、感
むるは、誉の類活、居り、侍りは、四段の活一格有
の類活、安し、清しは、久志の活、浅の類活、安ら
けし、清らけしは、明の類活といふ如くに試み
たまふべし。

體言

此は、詞の末に連なるを挙して載せたれば、見て
辨ふべし。

受辞

これは、上の六段の詞どもを、受くる辞なり。おの

「ばからしはく」の「が」「ぞ」「や」「か」「なむ」「こそ」等の係
辞に照せるは、是れ係結びの格、又は語詞と
同じければなり。将然連用等の目を録せるも、
辞は且語詞と同じく、其の別ある事を知らせ
むとてなり。はて又辞に照用の二段あり。大略
たゞ十九種に別ちたり。将の類、哉の類、竟の類、登
の類、令の類、被の類、不の類、有の類、来の類、如
の類、可、不可、等の十二は用辞なり。（さて、このうち被の類を上の六段は作用にして、不の類より下の六段は形状なり。）
詠の類、歎の類、疑の
類、願の類、請の類、助の類、まさ難の辞等の七

段は照辞なり。かくて此の用辞に将然連用等
の五段ある事も、もはら語詞と同じく、照辞は、
用辞の如き用きはなけれども、断ると続くと
の別ある故もて、其の属く所に定りあるなり。
其をま体将然言を不の類の辞にて受くるに、
将然の「ず」にて受くれば、将然言を受くる辞の
「む」に続き、連用の「ど」にて受くれば、連用言を受
くる辞の「けり」「けむ」等に続き、截断の「ぬ」にて受
くれば、其れはまし断ち止り、連体の「ぬ」にて受く
れば、照言まで連体を受くる辞へ続き、已然の

ぬ」にて受くれバ、已然言が受くる辞のど」ども
又續きて、連用言が來」の類なる辞にて受くるハ、將
然なれバ」にて受くれバ、將然言を受くる辞のむ」
に續き、連用なれバ」にて受くれバ、用言のあり」へ
續き、截断なれき」にて受くれバ、その儘斷止り、
連體の」にて受くれバ、體言また連體言を受
くる辞へ續き、已然の」にて受くれバ、已然
言が受くる辞へ續く。又體辞も、將然言を連用
辞の類なるか」にて受くれバ、その如く用言へ
續き、截断辞の願」なるや」にて受くれバ、斷止

又、連用言が連用辞の疑」なるや」にて受くれバ、そ
なるや」とて用言へ續き、截断辞の願」なるか」にて受
くれバ、斷止るのみなし。その餘ハ准へて知る
べし。全辞も、同樣にて、將然なる辞をバ、將然言
が受くる辞にて受け、連用なる辞をバ連用言を
受くる辞にて受く。是の故に、將然言を受くる
辞ハ、連用なる辞をだに受けず、連用言が受くる辞
も、截断なる辞をば受けざるなり。其他准して
知るべし。譬バ不知の類なるぬ」も、連體なる故にぬ」
のぬるとハ續くなれども、ぬらむぬべしとハ續

なれど、去る類の截断なるぬはぬらむぬべしなどは、續
けども、ぬのぬのなどは、續かなで、截断言を受くる
なりき、ぬなりつなりとを續けとも、流るなりぬ
るなりなどは、續かなで連體言を受くるなりはつる
なりぬるなりといひ續けども、つなりぬなりとは
續かざるがごとし。又ぬなりけりなるなる等のごとき、
三合の辭も其の格同じ。是等の辭は五段に分ち錄せ
ざる由なり。然しててのまであの又にすらをなどは、體
辭と體辭などに合さるも、合體言の格と同じの

習語格法

△詞なる活き、辭の如き、なほ字学ぶにても、先此の
國字暗記をなすべし。暗記せしめてに、活詞をとり誦む
べし。其を先四段なる活某行何々、一段なる活某行
何々、など云ふ如く、諸活詞をそを暗誦し次に辭
△を暗記をなすべし。それを將然は將の類何々、不なる類
何々、連體何々、諸何々、といふ如くに、五段とも各
數通をみて、よく暗記なる必要とす。然暗記し
たらむにも、古文を取り當て、試むべし。その
法、詞の多國記字始め、玉緒繰分、語学新書、辭格
考、等を見合せ、今に捷徑の法なる立て、

初学の徒を導くにハ其の法左の如し。

假目 此ハ習語ニ便ヨカラム為ニ設ク

△體言

- 开 有形體言
- 彡 無形體言
- 叉 假體言
- 甫 轉用體言
- 人 合體言
- 尸 屬體辭

△五十音行

ア カ サ タ ナ ハ マ ヤ ワ ラ

△活詞

- 四 四段の活
- 上一 上一段の活
- 下一 下一段の活
- 上二 上二段の活
- 下二 下二段の活
- 三 三段の活
- 四一 四段の一格
- 四一 四段の一種
- 下二一 下二段の活一格
- クシ 久志哉の活

△六用

- 已 已然言
- 青 請
- 守 將然言
- 迴 連用言
- 介 截斷言
- 述 連體言

△用辭

- 寸 將の類
- ム 去の類
- 立 竟の類
- 云 登云の類
- マ 令の類
- 衣 被の類
- し
- 不 不の類
- 月 有の類
- 从 来の類

女 如の数　丁 可　可 不可

△ 発辞　永 詠の数　欠 歎の数　足 疑の数　頁 願の数

青 請の類　力 助の数　大 雑　人 合辞

△ 雑　‖ 枕辞　｜ 序言　（ 古ハ発言用言

左ハ 〕 発言用言ヘツヾク　〔 辞ヘツヾク　〕 句ヲ隔テヽツヾク　［ 句ヲ隔テヽ遠クツヾク

⊐ 截断　‖ 係辞ノ重ル時軽キ方ニテ結辞ヘカヽラサルモノ　⊐ 截断言ヲ截断ナラシメズシテ下ヘ續クル所

∟ 詞ノ上ヘカヘル所　⌈ 詞ノ下ヨリカヘリツク所

‖ 意ノ裏ヘカヘル所　⊂⊃ 詞辞ヲ含マセタル所

▯ 詞ヲ含メテ下ノ句ヘイヒカケタル所　一 連用言ニテ言ヒサシテ置ク所

習語手引

コハ上ノ假目ヲ用ヰテ古文古歌ノ格ヲ容易ク習得シメ

心 爲 二
設 ク

一 萬

あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき野守は見ずや

君が袖ふる

一 同

ますらをのさつ矢たばさみたちむかひ射る的かたは

見るにさやけし

同 十一

足曳のやまどりの尾のしだり尾の[illegible]

[illegible]

古 四

玉きはる宇智の大野に馬なめて[illegible]

[illegible]

同 四

[illegible]

花ぞちりける

一 同
春やとき花やおそきとききわかむうぐひすだにも
なかずもある哉

八 同
もゝちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども
我ぞふりゆく

一 同
はるのよのやみはあやなし梅の花いろこそみえね
かやはかくるゝ

カレハセヌ

初学ノ徒ハ「ヲノミ書テ含メル意ニバ書ザルモヨシ以下含辞含語モコレニ效ヘ

十九 同
青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花の
ほころびにける

ナリ

同 六
神無月しくれふりおけるならのはの名におふ宮の
ふることそこれ

同 十四
津の国のなにはおもはす山城のとはにあひみむ
ことをのみこそ

於 廿
世中はいかにくるしとおもふらむこゝらの人にうらみらるれは
なかりける哉

後拾 十九
こゝろあらむ人にみせはや津の国のなにはわたりの
はるのけしきを

万一 長
国見をすれは国原はけふりたちたつ海原は
かまめたちたつうまし国そ秋津島やまとの国は

祈年祭祠
手肱に水沫かきたれむかもゝにひちかきよせ
てと云そ

勢語二段
西の京に女ありけり」その女世人にはまされり
けり」その人かたちよりは心なむまさりたり
ける」

土日初
をとこもすなる日記といふものを女もしてみ
むとてするなり」それの年の十二月の廿
日あまり一日の日のいぬの時にかどです」
いさゝかにものにかきつく」

古序初
やまとうたは人の心を種としてよろづの言の

並ぞそあれどもまし

源語
桐壺

いづれの御時にか女御あまたさぶらひ
給ひける中にいとやむごとなき際にはあらぬが
すぐれて時めき給ふありけり

文ニモ
含語多

キヿカクノ如シ、其ガ中ニ連體言ノ下ニ體
言ヲ略ケルヿ往々アリ、歌ニハ無キヿナリ、

此を習法の大略なり。然て此の習法を本国に
合せて数遍試むべし。然試みたらむには自然
本国を自在に活用(ハタラカ)すことを知得べし。然活用を
こゝに知得たらむ上に古文古歌に當て習ひ行
ふに其学日に異に進みて容易くその極に至
るべし。是を以てゆる獨学者の法となむありける。

明治四年といふ年の八月

權田直助しるす

この書近きころ求め得たる由ありて今また
改写了訖
八年十二月
直助書写

くラー